

Propensity Score Analysis of 10-year Long-term Outcome After Bypass Surgery or Plain Old Balloon Angioplasty in Patients With Metabolic Syndrome

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2012-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳沼, 憲志 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001438

順天堂大学 博士(医学)

氏名 柳沼 憲志

論文題名 Propensity Score Analysis of 10-year Long-term Outcome After Bypass Surgery or Plain Old Balloon Angioplasty in Patients With Metabolic Syndrome

(プロペンシティブスコアを用いたメタボリックシンドローム患者における冠動脈バイパス術と冠動脈バルーン形成術の10年間の長期予後の比較検討)

論文内容の要旨

経皮的冠動脈形成術 (PCI) と冠動脈バイパス術 (CABG) の予後は死亡、心筋梗塞などのハードエンドポイントでは有意差はないが、CABG は PCI に比べ再血管血行再建術 (TVR) が有意に少ない。しかし、糖尿病患者群ではハードエンドポイントを含め CABG 群で予後良好であると報告されている。しかしながらこれまでリスクの集積であるメタボリックシンドローム患者集団における PCI と CABG の長期予後を比較した報告はない。今回我々は冠動脈疾患を合併したメタボリックシンドローム患者において経皮的バルーン血管形成術 (POBA) を施行した患者と CABG を行った患者の10年間の長期予後を比較検討した。追跡率は100%であった。869人の患者のうち POBA を施行した患者は318人、CABG を施行した患者は551人で平均 10.1 ± 3.5 年の観察期間中両群合わせて総死亡221人 (うち心血管死118人)、TVR 256人であった。総死亡、心血管死は CABG 群で PCI 群に比べ高率であったが、TVR は PCI 群で高率であった。今回の研究は後ろ向き観察研究であり2群間のベースラインでの患者背景が異なっており、CABG 群で PCI 群に比べより重症な患者が多いことが死亡に差がでた原因と考えられた。propensity score を用いることで、後ろ向き集団の背景因子を補正すると総死亡、心臓死は2群間で差がなくなり、TVR は PCI 群で高率という結果であった。

現在の冠動脈治療は内服加療も含め日々進歩しており PCI であれば薬剤溶出性ステントの使用、CABG であれば off-pump、動脈グラフトの使用などにより治療成績が向上している。時代背景の違いから今研究の結果が必ずしも現在の治療状況下で当てはまるかどうかは不明であり、これは今回の研究の limitation ではある。しかし、冠動脈疾患を合併したメタボリックシンドローム患者の長期予後の観察データとして臨床的に意義あるものである。